

# J-CEF NEWS

no. 7

2015 SPRING

## リレーエッセイ

○ 社会を共に担うパートナーとして若者  
／土肥潤也 (NPO法人Rights理事／YEC(若者エンパワメント委員会))

## 実践事例紹介

○ 模擬請願を通して、地域の願いを届けるトレーニング  
／杉浦真理 (立命館宇治高校教諭)

## 特集

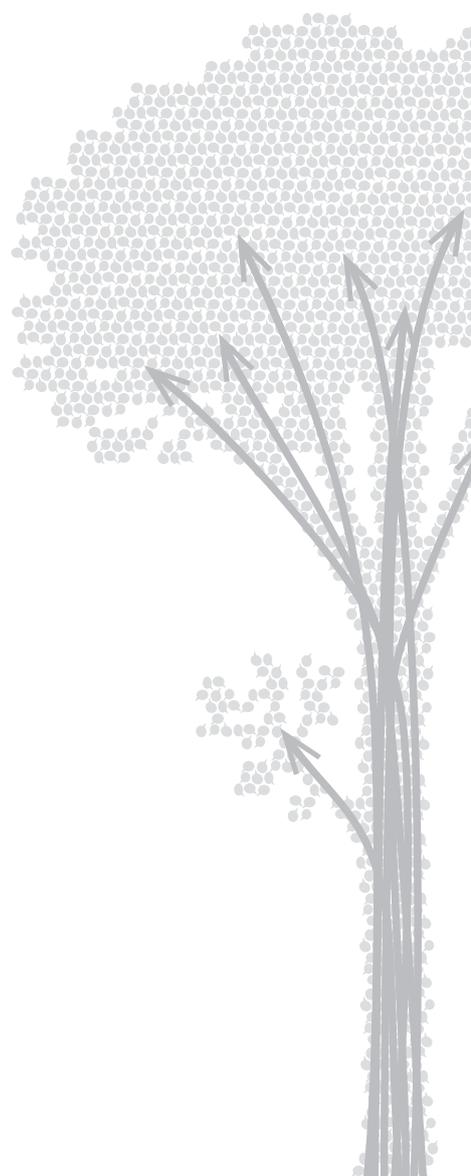
○ 「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」  
／市川享子 (明治学院大学ボランティアセンターコーディネーター)  
／西野偉彦 (一般社団法人生徒会活動支援協会代表理事)

## 書評

○ 教育システムと社会 ―その理論的検討― (広田照幸・宮寺晃夫 編)  
責任と判断 (ハンナ・アレント 著 ジェローム・コーン 編 中山元 訳)  
／村松 灯 (東京大学大学院教育学研究科博士課程／日本学術振興会特別研究員DC)

## セミナーレポート

○ 第2回シティズンシップ教育ミーティング キーノートスピーチ  
／小玉重夫 (東京大学大学院教育学研究科教授)  
／長沼豊 (学習院大学教育学部教授)



## 社会を共に担うパートナーとして若者

NPO法人 Rights 理事  
YEC(若者エンパワメント委員会)  
土肥 潤也

今年の3月に縁あって四国まで行く機会があり、高知市役所が推進する「こうちこどもファンド」という取り組みについてヒアリングをさせていただいた。

「こうちこどもファンド」とは18歳以下の子どもたちが、自主的に高知のまちづくりに関するアイデアを提案し、それに対して市が助成をするという取り組みで、平成24年から実施されている。

応募する側は、3人以上でチームを組み、生徒会メンバーで応募するチームもあれば、近所の小学生から中学生で応募をするチームもあり、応募の内容も、清掃に関するプロジェクトや、自主的に清掃をしてくれている近所のおじいちゃん、おばあちゃんに自分たちで育てた野菜をプレゼントしようとするもの、高知の伝統料理の料理本を作ろうとするものなど、子どもたちらしい自由な発想の提案が数多くあった。

この取り組みでユニークなのは、審査員の側にも公募で集まった子どもたちも審査員として、大人の審査員と共に

に参加をし、応募したチームに自由に質問をぶつけることである。

ところで、2010年の7月にベルギーを議長国とした第一回欧州ユースワーカー大会が行われた際の中の成果物である第一回ユースワーク大会宣言(Declaration of the First European Youth Work Convention)には、「どのような集団の若者であっても、それを包摂や参加の対象としてのみ見たりせず、逆に社会の多様性を促進する運動のパートナーと見るべきである」とある。

一方、日本の若者は、未熟であるともみなされやすく、社会の中でも意見を発しにくい立場にある。特に13歳から18歳ぐらいまでの中高校生の世代の若者は、学校や部活、塾、家をめぐってお決まりの生活をしており、社会の多様性を促進する運動のパートナーなんてもっての外で、大人の用意した世界から出ることができない。

しかし、「こうちこどもファンド」は、子どもたちを、この社会に多様性を促

進するパートナーとして位置付けている。高知市では、子どもたちは、今を担っているまちづくりの主役であり、だからこそ、提案をすることも審査することもできる。この「こうちこどもファンド」は、単なるまちづくりのプロジェクトとして説明するのではなく、子ども自身の可能性を引き出す環境を整えているという意味で、子どものエンパワメントとしての側面も持ち合わせている。こうして、高知市の子どもたちは、「こうちこどもファンド」を通じて、地域に多様性を生み出していく。

最後になるが、18歳選挙権の実現が目前になっている現在、18歳や19歳の若い有権者が生まれようとしている。この選挙権年齢の引き下げが、ただ「投票」を期待される若者を増やすのではなく、「社会の多様性を促進するパートナー」としての若者を増やすきっかけとなることを望んでいる。

土肥潤也 (kosuta10@gmail.com)